

小西信八の幼稚園観

湯川 嘉津美
(上智大学)

はじめに

小西信八(1854 ~ 1938)は、東京女子師範学校附属幼稚園の第三代監事として、創設期の幼稚園教育の基盤作りに尽力した人物である。小西の監事時代、附属幼稚園では1881(明治14)年と84年の2度、幼稚園規則の改正を行うが、なかでも84年改正の幼稚園規則は附属幼稚園での保育経験を踏まえて全面的に改められたものであり、それは80年代後半に普及をみせる各地の幼稚園に大きな影響を与えた。また、小西は幼稚園と小学校の連絡問題にも力を注ぎ、幼稚園修了児の小学校1年後期への編入を実施して、これに対応した。さらに、84年2月からは文部省普通学務局兼務となり、文部省の幼稚園政策にも関与して、簡易幼稚園の普及を期した。

このように、小西が附属幼稚園監事として果たした役割は大きく、彼の幼稚園教育への取り組みが、1880年代の幼稚園の在り方を方向付けたといっても過言ではない。そこで、本稿では従来の研究においてほとんど言及されることのなかった小西信八の附属幼稚園監事としての活動に注目し、その検討を通じて幼稚園教育の進展に果たした小西の役割や彼の幼稚園観について明らかにすることとしたい。

1. 小西の附属幼稚園監事就任と幼稚園規則の改正 (1)1881年改正の幼稚園規則の特徴

小西は1879(明治12)年5月に東京師範学校中学師範学科を卒業し、千葉中学校兼千葉師範学校教師として赴任した。千葉女子師範学校教師長兼監事を経て、80年9月に東京女子師範学校訓導となり、翌年7月、同校助教諭兼附属幼稚園監事に就任した。

小西の監事としての最初の仕事は、1881(明治14)年の附属幼稚園規則の改正であった。81年の改正では、幼稚園の目的、保育料、保育内容、組の編制の四点について改編が行われた。保育内容についていえば、「保育科目(物品科、美麗科、知識科)」が廃止され、従来、子目と呼ばれていた事項が「保育課目」として示された。ただし、この保育科目の廃止によって、保育内容はねらいを欠いた課目の羅列にすぎなくなり、各組の保育は新たに作成された保育課程表にしたがって行われることとなった。また、保育内容の改定も行われ、「説話」が「修身ノ話」に、「博物理解」が「庶物ノ話」に改められ、「五彩球ノ遊び、三形物ノ理解、貝ノ遊び、木片ノ組ミ

方、紙片ノ組ミ方」が削除された。そして、新たに「会集、雛遊び、結び物、読ミ方、書キ方」が加えられ、保育課目は24種となった。

注目すべきは、恩物の名称を幼児にわかりやすいように平易化したことと、保育課目に「読ミ方」「書キ方」を加えたことである。恩物名称の変更について、小西は次のように述べる。

「こゝへ来てから関さんの恩物の書が漢語的で一寸子供にはむづかしい、……これをもつと通俗的にしようと思つて那珂校長に云つて十四年にあらためてぬひとり、かみさし等とかへました。」(「私の監事時代」『幼児の教育』29-1、1929年)

当時、小西は東京女子師範学校校長那珂通世とともに国語の学習を平易にするために、漢字を廃止して、発音式仮名遣を用いるよう主張しており、恩物名称の平易化は、そうした小西の考え方を反映したものといえよう。

また、「読ミ方」「書キ方」の導入について、小西は「多くの父兄から幼稚園は何も教へて貰はぬといふ不平」があり、そうした親たちの要求をいれてこれらを保育課目に加えたという。これにより最上級の「一ノ組」では、毎日「読ミ方」か「書キ方」のいずれかの教授がなされることとなった。しかし、「読ミ方」「書キ方」の保育課目への導入は、幼稚園では文字の読み書きを教えず、子どもの遊び活動を中心に保育を行うとした創設時の幼稚園の原則を崩すものであり、それはその後の幼稚園教育の在り方にも大きな影響を与えることとなった。

(2)1884年における幼稚園規則の全面改正

1884(明治17)年2月、附属幼稚園規則は全面改正された。おもな変更点は、組の編制、保育課目、保育料の三点である。まず、組の編制についていえば、それまでの4組から6組編制に変更して、小学校と同じく6ヵ月を単位として組の編制を行うこととした。また、保育課目についても「雛遊び、土細工、鎖繋ぎ、結び物、体操」の5課目を削除して、煩雑を極めていた保育課目の整理を行っている。

84年改正の幼稚園規則の特徴は、保育用の図書・器具や保育要旨が詳細に示されていることである。保育用の図書・器具についていえば、それは出版社・製造者の氏名、住所とともに示されており、幼稚園で必要な図書・器具の種類とその入手先を知

ることができる。また、保育要旨の項には幼稚園教育の意義や全般的な保育の方法、注意などが述べられ、さらに保育課目のねらいと用い方についても詳しく示されている。この保育要旨の提示には、各地の幼稚園に対して幼稚園教育の模範を示すという意図が込められていたと考えられる。実際、同規則は1884年2月15日文部省達第3号による学齢未満幼児の就学禁止を契機として各地に設立された幼稚園において、そのモデルとして採用されたのである。

2. 幼稚園と小学校の連絡問題への対応

小西は1881年の幼稚園規則の改正において、組の編制を3組から4組に増やし、「一ノ組」を小学校への「つなぎの組」とみなして、幼稚園から小学校への円滑な移行を図ろうとした。そして、82年9月より「一ノ組」修了者の附属女児小学校1年後期(11級)への編入が実施され、83年9月からは東京師範学校附属小学校でも幼稚園修了者の1年後期への受け入れが開始された。小西によれば、当時「幼稚園と小学校の仕事が全然異つてゐたので、幼児をしてこの急変に耐えさせることは面白くないといふ説」があり、幼稚園と小学校の連絡問題に対しては随分頭を悩ましたという。そうした折に、欧米で小学校の学習への漸次的な移行のために設けられていたコネクティング・クラス(connecting-class)のことを知り、その設置を計画したが、予算の関係上実現せず、結局、幼稚園において読み書きを教授する「つなぎの組」を設けることにより、小学校への接続を図ろうとしたのであった。

ところで、小西はこのconnecting-class(接続級)に関する知識をどこから入手したのだろうか。筆者は当時日本に輸入されていた外国幼稚園書を探索してHailman, W.N., *Kindergarten Culture in the Family and Kindergarten*, 1873の第11章にThe connecting-classと題する論説を見いだした。同書は東京女子師範学校附属幼稚園の旧蔵書であり、小西がこうした外国幼稚園書から接続級の在り方を学んだであろうことは疑い得ない。同書によれば、接続級は幼稚園修了後の2年間設置するものであり(7～9歳児対象)、そこには接続級における具体的な教育方法についても詳しく紹介されている。小西は、こうした知識をもとに接続級の必要性を述べているが、日本では幼稚園から小学校に移行する前に2年間の接続級を設けることは難しいとし、欧米の接続級が果たしている役割を幼稚園の役割に読み替えて、「父母の膝下なる自由嬉戯の世界と小学教課の世界とを接続する幼稚園」の設置を奨励したのである(「静岡県求益会出品解説」1884年)。

3. 小西の幼稚園観

小西は1885(明治18)年9月、大阪の愛珠幼稚園監事豊田文三郎に宛てた書簡において、自らに課せられた使命について、次のように述べている。

「ワガイマ スペシ モハンハ ジュンスイノ ヨウチエン モハン タランヨリ ムシロ ワガクニノ フウゾク シンダイニ カナエル モノニシテ イツクノ クニマチ ニテ オコナワレンモノヲト イウチウモンアリ」

当時、小西は東京師範学校教諭兼附属幼稚園主任の傍ら、文部省普通学務局を兼務しており、そこでは幼稚園を日本の風土に適合的なものに改良するとともに、全国に普及し得る幼稚園の模範を示すよう求められていたのであった。そうしたなかで、小西は地方の学事担当者に対して、幼稚園設置の必要性和、簡易な方法による幼稚園経営の在り方を具体的に示して、その普及を期した。それは小学校の校舎の一室ないし二室を保育用に充て、熟練の保姆一人と女小使一人、幼児の数に応じた机と椅子、恩物を用意するだけの簡便な方法であったが、これも独立の幼稚園と同じ目的を達することができる極めて有益な施設であるという(前掲「静岡県求益会出品解説」)。なお、この方法は84年2月の学齢未満幼児の就学禁止の後、各地に設置される小学校付設保育科のモデルを示すものであった。

以上のように、小西は東京女子師範学校附属幼稚園監事として、日本に適合的な幼稚園の在り方を模索した。なかでも「読ミ方」「書キ方」の保育課目への導入や幼稚園における「つなぎの組」の設置などは、欧米のフレーベル主義幼稚園にはみられないものであり、そこに小西の幼稚園認識のありようを窺うことができる。

小西は日本で最初の本格的なフレーベル伝の翻訳者であり、フレーベルの幼稚園思想にも通じていた人物である。また、欧米の接続級に対する正確な知識も有していた。その小西がなぜ欧米の幼稚園とは異なる方向に日本の幼稚園を展開させようとしたのだろうか。小西が監事に就任した当時、全国の幼稚園数はわずか7園に止まっていた。そうしたなかで、小西は幼稚園の普及のために、「ジュンスイノ ヨウチエン」の模範を示すよりも、日本人に受け入れられる幼稚園の在り方を示そうとしたのであった。この小西の努力により、幼稚園は創設当初の翻訳調を脱して日本に適合的なものに改変されるが、他方、小学校の準備教育の場としての幼稚園認識は、その後の「学校的幼稚園」の普及に寄与することとなった。そして、以後の幼稚園改革ではその克服が課題となるのである。